



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	藤女子大学キリスト教文化研究所編「平和の思想 : キリスト教からの再考察」(リトン、二〇〇八年)
Author(s)	石川, 明人
Citation	基督教學, 44, 49-54
Issue Date	2009-07-31
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/46731
Type	other
File Information	44_49-54.pdf



藤女子大学キリスト教文化研究所編

『平和の思想——キリスト教からの再考察——』

(リトン、二〇〇八年)

石川 明 人

本書は七名の執筆者による論文集である。それぞれは書名のとおり、キリスト教の観点から「平和」について考察するというテーマで統一されている。各論文は多様で、聖書学、哲学、歴史学など様々な分野の専門家によって書かれており、豊かな内容のものとなっている。以下では、まず七つの論文それぞれの概要を掲載順に簡単にまとめ、その上で、本書全体の構成と主旨について評者の見方を述べさせていただくことにしたい。

*

まず第一論文は柊暁生氏による「シャローム（平和）のギリシア語訳——七十人訳聖書——についての考察」であ

る。ここではヘブライ語の名詞「シャローム」のもつ意味内容の多様さについて、特にその語が七十人訳のなかでどのようなギリシア語に翻訳されたかが詳細に検討されている。著者は一一の節にわけてギリシア語との対応を分析し、名詞シャロームは七十人訳では、挨拶する、平和に生きる、平和な、よい状態である、持つ、好意ある、恵み深い、聖なる、救い、完全な、健全である、健全な、愛すべき、喜ぶ、などの意味で理解されていることを明らかにしている。そして一連の考察をとおして「おわりに」で著者は、「現代世界においても平和の実現が困難であるという事実は、実は平和という事態が人間生活の多面的な局面の総体にかかわるからではないか」と述べている。確かに平和とは人間社会の一領域の問題ではなく、あらゆる領域の根本でもある。平和という言葉の重みを再考し、自分たちの望んでいる平和が真の意味での平和であるかどうか批判的に振り返ることが求められている今、旧約聖書の言語からそれを問い直すことの意義は大きいであろう。

第二論文は阿部包氏による「新約聖書における平和」

である。著者はイエスの言葉「地上に平和をもたらすためにわたしに来た、と思つてはならない。平和ではなく、剣をもたらすために来たのだ」に注目する。イエスの説く「良い知らせ」は既存秩序を揺るがしかねない反社会的な面をもっており、彼にとって平和とは創造者だけが与えるもので、もし肯定的に語られる平和があるとするなら、それは「神の平和」「神との平和」でしかありえないという。また「再臨の切迫感」をもっていたパウロにとって、その世界観と時代認識はイエスのピステイスによつて神との平和が回復されたという神学的発見に基礎づけられていた。パウロにとつて重要だったのは、キリストによる共同体がどのような状態で再臨を迎えるかであり、よつて愛の勧告によつて確固たるものとなるはずの神との平和も、共同体内倫理に留まるという限界があつたと指摘されている。著者は「パウロにおいては、その切迫した再臨待望のゆえに、イエスによつて突き破られた共同体内倫理が再び、装いを新たに構築されつつあるように思われる」という。これは著者が本論の冒頭で、平和とは「関係的概念」であると述べている

ことにも連関している。「平和」をどのような枠内（関係）で考え主張するかについてのジレンマを新約聖書から再確認させる本論は、極めて現代的な問題提起として注目に値する。

第三論文は渡邊浩氏による「中世ヨーロッパにおける「神の平和」——「神の」平和運動としての一面——」である。カロリング帝国がカールの死後急速に解体へ向かつていったころ、とりわけフランスでは在地の領主によつて王権の衰退を利用した領地の争奪が繰り返され、王権の保護を失つた教会や修道院、そして領地の農民たちの多くが抗争の犠牲となつていた。そうしたなかで「神の平和」運動が現れる。本論で著者は、この「神の平和」のうち本来は世俗権力が担つた治安や秩序を維持するという部分を世俗的側面と捉えて、その枠を越えたキリスト教的側面を探つていくことを課題としている。シャルーとリモージュでの教会会議、一〇二七年のトゥールージュでの会議、さらにポワティエ教会会議や一〇五四年のナルボンヌ教会会議、クレルモン教会会議などが分析され、最後に著者は、「一般に平和は「戦争

と平和」というように戦争と対で語られることも多い。確かに戦争に対して平和を対置することはできるが、中世に展開した「神の平和」を見てみると、逆は必ずしもあてはまらないことに改めて気づかされる」という。というのも「無秩序や戦乱に限らず、疫病も飢饉も道德的墮落も平和に反する状態と見なされていた」からである。この点で本論は、前の二つの論文で論じられた「平和」概念の多様性や関係性の問題が、実際の中世キリスト教においても明確に見てとれることを示しているといえよう。

第四論文は八巻和彦氏による「ニコラウス・クザーヌスの宗教寛容の思想」である。著者によれば、クザーヌスがその生涯において残した三〇〇近い説教のうち、最も初期のものにすでに他の宗教への関心が示されているという。それらにおける論法は「一なる神が、その多様な属性に応じて、様々な民族によって別々の名称を付与されている」がゆえに、キリストの存在も世界中で信じられている、というものであった。著者はクザーヌスの生涯を概観しながらその宗教寛容論を形成している諸要

素を分析する。クザーヌスは一四五三年に『信仰の平和』を著したが、そこですでに、もう「キリスト教」という固有名は必要ではなく、全ての現存の宗教を超えた理念的な宗教が諸宗教の根底にすでに現実存在しているという理解に達していたと著者は解釈する。クザーヌスはその生涯をとおしてイスラームとの関係の平和的解決を教皇に説き続けたのであり、その意味で彼の寛容論は明らかに平和思想でもあった。「善そのものとしての神への深い〈信〉に裏打ちされた樂觀的な被造世界観が、すべての宗教が善を求め至福を求めるものとして共通の本質をもっているというクザーヌスの宗教観をも支えていた」のである。クザーヌスの「宗教寛容の思想」は、二一世紀の平和にむけても振り返るべき重要な議論の一つであろう。

第五論文は梶潟弘市氏による「カントの永遠平和の思想―発展史的考察―」である。著者はここでカントの哲学全体を視野に入れて、「平和」に関する議論の形成と発展を詳細に追っている。たとえば『世界市民的意図における普遍史のための理念』とその一一年後の『永

遠平和のために』、そしてまたその二年後の『人倫の形而上学』等とは、「国際連合」の意味に大きな隔たりがあることなどが指摘されている。カントがこれらの論考を書いていたのは、フランス革命によってヨーロッパに戦雲が立ち込めていた時代である。そのような背景ゆえか、『永遠平和のために』は具体的な政治的提案ともなっているが、その現実的な平和構想の根底には当然ながら彼自身の間観や歴史観があった。著者は最後に、国民の自由と権利を保障する統治形態としてカントのいう「祖國的統治」に注目し、「あらゆる国の人々が例外なく、この閉ざされた地球を「祖國的」な場と考えるようになり、そのことを深く認識しながら行為し、活動するような日が到来するまで、人類が真に永遠平和の可能性を予感することはないであろう」と結ぶ。本書の副題からすれば、本論ではキリスト教との関連について十分に言及されていないところが残念ではあるが、カントの平和論を彼の哲学全体を視野に入れて発展的に分析していくことは、現代の戦争と平和を考える上でも重要な基礎的な作業だとして評価されねばならない。

第六論文は内田博氏による「オランダにおける非暴力の思想―ヘンリエッテ・ローラント・ホルストの場合―」である。ローラント・ホルストは詩人・マルクス主義者として自己形成を遂げた後、やがて「ライフスタイルとしての社会主義」を主張するようになる。晩年の彼女は宗教的感情を重視するようになるが、それは「非有神論的汎神論の立場」ともいえるようなもので「生命的なるもの」万物が結びついているという感覚」でもあった。著者によれば「生命愛の強化↓非暴力的生活形態⇨社会主義」という回路に期待するというのが彼女の思想だったと解釈することもできるといふ。ローラント・ホルストが途中でマルクス主義から離れたことは、社会や行動の暴力性を測定しうるツールを失うことを意味し、そこに彼女の歴史的な限界があったともいえるが、しかし同時に、宗教的感情を基盤としつつ、ライフスタイルとしての社会主義という形態でもって非暴力的な生活と社会の形成を志向した点に、現代の平和学に対する彼女の先駆性を見てとれると指摘されている。二〇世紀の平和思想の一つとして、広い意味での宗教性と社

会主義とが融合した形で展開される彼女の議論は、あらためて注目されるべき価値を秘めている。

第七論文は松岡洸司氏による「キリシタン時代の無事・平安の道」である。ここでは一五四九年から一六三九年の約一〇〇年が三つの時代に分類され、それぞれにおける平和の概念が考察されている。第一期の一五四九―一五八七年では、キリスト教における「平和」の概念は「無事」という言葉であらわされた。日本では「和平」が早くから用いられていたが、「平穩」「無事」「安隠」「安閑」などの言葉も用いられたという。第二期の一五八七―一六一四年は、キリスト教が宣教され貿易も盛んに行われた時代である。天正遣欧使節が持ち帰ったなかに『コンテムツス・ムンヂ』『ざや・ど・ペかどる』があり、その中にも「無事」「安閑」という言葉がみられ、殉教の概念もあらわれているという。第三期の一六一四―一六三九年はキリシタン迫害の時代で、元和の大殉教、鎖国令、島原の乱などがあり、殉教もあいついだことなどが整理されている。十六世紀から一七世紀にかけて、キリスト教における「平和」が日本でもど

う捉えられてきたかを整理するという本論の試みは、キリスト教そのものを見つめ直すことにもつながる作業といえるかもしれない。

*

さて、本書はタイトルの通り「平和」を主題とした論文集である。最初の柊氏の論文でも示されているように、「平和」とは「挨拶」「喜ぶ」「安心」「繁栄」などを含む実に多様な内実とニュアンスをもつ言葉である。また内田氏も指摘しているように、現代において「平和」とは単に戦争の不在という点からだけでは論じられない。だが本書の「まえがき」で、イラク戦争やパレスティナ問題、およびその他の紛争に触れているところからすると、やはりここでも「戦争」が大きく意識されているのは明らかであろう。

戦争に関する議論としては、例えばクラウゼヴィッツが『戦争論』のなかで述べた「戦争とは他の諸手段による継続された政治以外の何ものでもない」というテーゼが有名である。彼は戦争を単純に政治にのみ還元しようとしたのではなく、個々人の精神的な要素やその他の不

確定な事柄も考慮に入れてはいたが、しかし最終的にそれらと戦争との関連を十分に議論することはできなかった。そうした点について、戦史家のキーガンはクラウゼヴィッツを批判しながら「戦争とは文化の発露である」と主張した。それはもちろん戦争を肯定・正当化するためではなく、むしろ人類の文化的営為はやがて戦争を時代遅れなものとするだろうという楽観的な推測を含んだものだ。彼は、戦争は単に軍事的合理性や外交的な効率性のみに従うのではなく、宗教、道徳、イデオロギ―、死生観などの文化的諸要素に大きく支配されるという理解を示したのである。

これまで人類がおこなってきた多くの戦争は、何らかの意味で「平和のため」「正義のため」と称してなされてきた。だとすれば、本書でも指摘されている「平和」という言葉の意味の多様さは、「平和」の豊かさや可能性であると同時に、弱点でもなかるうか。「平和」「正義」「解放」「神」などの言葉ほど戦争や暴力の正当化に利用されやすいものはない。現にキリスト教の約二〇〇〇年の歴史に戦争や暴力が無縁でないことは誰も

が知っている。ベイントンが『戦争と平和に対するキリスト教の態度』で概観してみせたように、これまでキリスト教がかかわってきた「戦争」や「軍事」を正面から見つめることも、「平和」再考のための作業として欠かすことはできない。

柊氏は「まえがき」で、「平和を知らずに平和を求めることはできず、平和を求めることなくして平和は実現できません」と述べている。評者もこうした見方に同意する。だが同時に、二〇世紀を代表する戦略思想家リドルハートが名著『戦略論』でいったように、「もしあなたが平和を求めるならば、戦争を理解せねばならない」という意見も正しい。キリスト教研究者は、真摯に平和について考えるならばなおさらのこと、キリスト教と「戦争」「軍事」との積極的な関わりにも目を向けねばならない。本書における多様な議論をきっかけとして、「平和」に関する思索と実践がより活性化することを期待したい。